瀬戸内晴美長編選集　第十二巻

あなたこだけ

花怨

講談社

瀬戸内晴美長編選集　第十三巻—あなたにだけ・花怨
昭和四十九年十二月二十日第一刷　昭和五十一年十二月八日第四刷発行
著者—瀬戸内晴美　造本—杉浦康平＋海保透　発行者—野間省一
発行所—株式会社講談社　東京都文京区音羽二—十二—二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)　振替東京八—三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社・株式会社興陽社　製本所—黒柳製本株式会社
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。
©瀬戸内晴美　昭和四十九年　Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。　(文1)

瀬戸内晴美長編選集　第十三巻　目次

あなたにだけ――5
花怨――253

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あなたにだけ

灰と真珠

どうしようかしら、また、だめになっちゃったの、ぱたっと風が落ちたみたいになるのよ、胸ん中がしいんと白っぽくなるのよ。そうなるともう、どんな顔していいかわからないんだもの、ニキが優しくしてくれればくれるほど、美波どうしようもなくなるのよ。頭が痛い、おなかが痛いって、ぶつくさいって、むうっとふくれてるの、ええ、ニキとはずいぶんつづいたのよ。こんなことはじめて、八ヵ月もつづいたなんてキセキみたい。ニキの外に一番長くつづいた子が三ヵ月だもん。でもニキのこと嫌いじゃないの、今だって。ただ、ニキといても胸の中が前みたいにきいんと鳴らなくなったのよ。してもらう時はいいの、でも終ったとたん、すっと寒いような気持になるわ。それに、してもらう前も、前みたいにわくわくっとこないのよ。要するにニキに飽きたっていうんでしょ。オネエマのいうことわかってんだ。でも、どうしようもないってこの気持わかってくれない。ニキに悪いもの、このままじゃ。ね、逢って話聞いて。

言いたいだけ、勝手にいって電話をきるのはいつもの美波のやり口だった。忙しいからだめといったところで、自分が来たければ、こっちの都合などおかまいなしにやって来て、相手にされなければ、部屋のすみのディヴァンに寝ころび、イヤホーンを耳にさしこんで小型テレビの漫才なんかを熱心に見ている。

来客の相手とか、どうしても時間をきって片づけなければならない仕事とかから手も離せず、捨てておいても一向に気にもしないし、気にもならない美波だった。

今日だって、どうしても、夕方まではだめだといったけれど二時間もすればやって来るにきまっていた。

香取桐子は机の上の紙の上に視線をもどした。

五間の豪勢なアパートの見取図面がそこにある。今夜七時に手渡すことになっているその部屋々々の室内装飾のプランは、まだ三部屋しか出来ていない。

テレビによく顔を出している有名な初老に近い喜劇俳優の何度めかの若い妻が、最近離婚して、その慰謝料の一部で買いとった高級アパートの室内装飾だった。

モダンで明るく、ぱあっとロマンティックにお願いしますわ。ええ、暗い色はごめんだわ。だって、あたしの立場が立場でしょ。ご存じでしょ、もちろん、あたしの離婚話。離婚した女が惨めらしくみせたら、世間のいい笑い者ですわ。世間じゃ、友田に新しい恋人が出来て、これまでの彼の妻同様、あたしが捨てられたのだと思いこんでいますわ。週刊誌お読みになったでしょ、もちろん。ええ、どうせ、でっちあげですのよあんなもの。でも、あたし、いいわけなんてしやしません。どっちだっていいんですも

の。友田になんかみれんのみの字もあるもんですか、お金は充分とりあげてやりましたしね。あの人だって、世間が思ってるようにお金なんてないんですのよ。税金がひどいんですもの、たまりっこなんてないわ。でも私の慰謝料くらい、彼のために出すところはあるんです。今度の友田の女のこと御存じでしょ。小説家ですのよ。まだ一冊しか本を出していないけど、とにかく小説家なの、三千部刷って、千部しか売れなかったのよ。しかも作者が四百部買ったんですって。これはほんと。アンチロマンですってよ。あたし読んだけど、一頁と読めなかったわ。灰と真珠という題。何が灰と真珠よ。その本屋、その一冊でつぶれちゃったの。もちろん、色じかけで出させたにきまってるわ、でなきゃ、あんなつまらない本、出す馬鹿がどこの世界にいるもんですか。器量の悪い、色の黒い、ごりごりした女なの、でもたいへんなエロ好みだっていうことだわ。女の助平なんて最低よ、ねえ、そうお思いにならない。あら、そうそう、何の話だったかしら、ええ、ベッドね。そうねえ、やっぱり、ベッドはダブルにしときたいわ。

ぽってりした重々しそうな唇から、思いがけない速さで豆でもはじき出すようにとめどもなく飛びだしてきた女のことばが、アパートの見取図の白い紙面から、テーブルに吹きこんだ声のようにありありとよみがえってくる。小柄で小肥りの女。

このアパートは買取者の好みに応じて間じきりもすれば、装置もする仕組だった。台所は白とブルーで統一し、食堂はベージュとローズ色。女は寝室はピンクで、居間はオレンジ、応接間はグリーンにしてはどうかと真顔でいう。色盲じゃあるまいし。香取桐子は、煙草に火をつけながら、見取図の横にひらいたスケッチブックに、居間に置く椅子のデザインを三つばかり描いてみた。客の趣味の悪さに腹を立てず、客の趣味の悪さをなだめすかして、一種の統一のある色調と、家具デザインの中にまとめあげること。この仕事に入ったはじめの頃、自分の好みと客の好みの相違のはげしさに、ノイローゼになりそうだった一年ばかりをのぞいては、桐子は相当客馴れてもきたし、図々しくもなってきたと認めている。そうだ、一昨日見た新作家具展示会で銀賞をとった檜山哲の寝椅子を、居間に置けばどうだろう。薄い菫色に染めた繻子地で張られたその寝椅子は、なだらかな曲線を持って横たわっている女の肢体をあからさまに連想させた。あるかないかの起伏が、そこに身を横たえると、女の軀のまるみとくぼみにぴったりと吸いついて、女の軀と寝椅子はたちまちひとつにとけあってしまう。菫色に横たわる女は、何もつけない皮膚そのものの色調が最もふさわしい。寝てごらんよ。ほんとだ、あんたに拵えたような感じだな。背後の人群でそんな声がおこり、くくっと咽喉にふくませた甘えた笑い声といっしょにベージュ色の極端なミニのワンピースのやせた女が出てきて、ふわっと、鳥が降りるようにその寝椅子に横たわった。ミニスタイルにあわせたパーマのかからない長いとき放しの髪が肩から胸へ流れ、さらに椅子をおおった。売れ

ているファッションモデルらしいということと、その女のパトロンが、今そこに来合せている各デパートの社長や、家具売場部長か、あるいは高級家具店の店主の一人らしいということは察しられたが、桐子はその女の名も知らない。老けているのか若いのかわからない。女の髪もまつ毛も本物かどうか。異様に細い脚と腕が痛々しく薄青い化粧が蠟人形のように見えた。うすいウールのベージュのワンピースが、横になった女の軀の流れに濡れた皮のようにくっついていた。女が寝椅子で片腕を軽く曲げ、ゆっくりそれをおろし、ゴヤのマヤのようなスタイルをとって、目をあげた。そこに桐子が立っていた。桐子の瞳の上で、女の薄茶色の表情のない目が動かなくなった。

美波が入って来たのは、電話から十五分もたっていなかった。ドアをあけてやると、肩をすくめ、舌をだし、すっと桐子の軀の横をすりぬけて風の様に部屋の中へ入ってしまう。灰色のドアには部屋番号だけで、名前も看板も出してない。入ったとっつきの部屋が応接間兼仕事部屋ということになっている。いわば桐子の事務所とみなされる部屋だ。白っぽい灰色の壁に、ほんの少しピンクの入った灰色のカーテン、机も椅子もマホガニー材のさっぱりしたものだった。

その部屋の右手にキッチンがあり、左手に寝室がある。バスルームは、玄関を入ってすぐ、キッチンのとなりに廊下に面していた。

「だめだといったでしょ、まだ」

「うん、だって美波、あの時、もうこの近所の喫茶店にいたんだもん、歩いて来たら十五分丁度だった」

「七時までにこれ、渡さなきゃならないのよ」

「わかってる。その間、美波お風呂に入って寝てるから。昨夜徹夜で、眠くてしようがないの」

「うちじゃなかったの」

「昨夜から家出してんの」

「いやあね、じゃ、そのうちニキがここへ探しに来るにきまってる」

「大丈夫よたぶん、今度は」

「どうせ、昨夜ひとりじゃなかったんでしょう」

美波はにやっと笑って、その瞬間だけ、さも幸福そうに顔をかがやかせた。叔母と姪の間柄だけれど、幼女語のオネエチャマがちぢまって今もってオネエマとしか呼ばない十九の美波より十六年長の桐子は、美波の母親の杉子よりは、はるかに美波の身辺の事情にはくわしくなっていた。

十七の年から家出して家によりつかない美波を、杉子に泣きつかれて、ずいぶんあちこち探し歩いたこともあるし、睡眠薬遊びで保護されていた美波を警察へもらいさげにいったこともある。

美波は桐子には何もかくさない。

「オネエマだって、若い時は不良だったんだってね、聞いちゃった。ママ公が何も美波のことでキャアキャアいうわけないじゃないの。ねえ、うちにはちゃんと不良の血統が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

流れてるんだもの、おじいちゃまが、女湯してすごかったんでしょ。それから、オネエマ、美波と、淫蕩の血がつづいたのよ」
「よしてよ。おじいちゃまと美波はしらないけど、あたしは少くとも淫蕩なんかじゃありませんからね」
むきになっていうのも馬鹿らしく、美波相手だと桐子もついにやにや笑ってしまうのだった。
乃利夫も美樹も、気苦労なほど堅物なのに、どうしてうちには美波のような娘が生れたのかしらというのが、杉子の口癖だった。美波が事をおこす度、相談役にされるおかげで、もう今では家によりつかない美波はまるで桐子の娘か妹のようにまかせっきりにされている。散々迷惑をかけられたり、心配させられたりしたせいか、桐子には美波が何をしても結局は許してしまうし、憎めないのだった。
セックスなんてビフテキたべるのと同じよ。美味しくて栄養にするだけだもん、など、フーテン族のようなことをいう十九の少女は、ちゃんと覚えてないけど、いっしょに寝た男の子は三十人くらいかなんなど、けろりという。どうせ話半分と聞いてみても、やはり母親の杉子など聞いたら、気絶しかねまじいことばだった。
腰から下が、裸のように見えるぴったり軀にくっついたジャージイの黒いスラックスに真赤なブーツを穿き、男の子のような汚れたジャンパーをひっかけている。そんなスタイルが似合う、どこかボーイッシュな美波の、胸と腰だけは、異様なほど豊かにみのりきっている。

闖入者にかまわず、桐子は仕事をつづけていく。バスルームで、湯のほとばしる音と、のんきな鼻唄が聞えていたと思うと、いきなり桐子の背後で声がした。
「オネエマ、ヒルドイドない？」
「何よそのヒル何とかって」
「キスマークの消える薬よ。しらないの、無学ねえ」
「無学で悪うございましたね」
「だって、ほら、こんなだもの」
ふりむくと、さすがに桐子は目をみはった。申しわけみたいなビキニパンティだけつけて、素裸同様の美波がつっ立っている。指さしてみせる桜色の軀じゅうに、菫の花をおしつけたような血のしこりがちらばっている。
「いやな子ね、ライオンとでも寝たの」
「うん、ほんと、オネエマ、うまいこというわね。ほんとにライオンちゃんみたいなすてきに勇ましい男の子だったわ。ジャズマンなの、ピアニストよ。すっかり夢中になっちゃった。何だか、本気になりそうよ」
「もうたくさん。美波はいつだって、どの子の時だって、最初はそういってるじゃないの、聞きあきたわ。さ、仕事の邪魔しないでよ。冷蔵庫にレモンあるでしょ。レモンでこすっておけばいくらか消えるんじゃないの、それとも大根おろしでもはっておくことね」
「いやあね。インク消すんじゃあるまいし」
湯につかると、美波の皮膚の菫の花はいっそうみずみず

しく花びらをおしひろげるような感じがする。ひりひりしみる痛さがいっせいによみがえってきて、眉をよせずにはいられない。バスタブの中にゆっくり全身をのばしながら、しみる痛みに耐えていることに快感がないでもなかった。

この傷あとは今日から明日にかけてはまだ菫色をたたえ、明後日あたりからはくちなしのくさったようなうす黄色に変色していく筈だった。傷の周囲はほんのりと緑色の翳をもち、かこまれたレモン色の翳は、日一日と薄れ、やがて、氷がとけるように、いつのまにか気がついたら跡かたもなくなっている。しかしそうなるまでには、たっぷり五日はかかるだろう。美波がアニキを縮めてニキと呼んでいる古川元は、それを決してみのがしはしない。ニキもいいけど、几帳面すぎて……それにこの頃、まるで男のヒステリーみたいにいらいらしていて面白くないなあ。美波が今日は昼まで眠りたいといったら、はじめの頃なら、しようがない赤ん坊だなあって、笑うことはあっても怒ることなんか決してなかった。それがどうだろう。この頃ときたら、いいかげんにしろ、子供じゃあるまいし、さっさと起きて、朝めしくらい食わせろだって。美波はニキの女中になるためいっしょに暮したんじゃない。ニキが、これまでの男の子より一番セックスを満足させてくれたし、やさしかったし、物識りだったし、理解してくれてるように思ったから、要するにニキといることが居心地よかったからいっしょにいる気になったにすぎないのに。この頃のニキみたいだといっしょにいたって何も面白くない。ニキに内緒で、この二ヵ月に三人、よその男とデートしてみた。二人はつまらなくて、ああこんなことなら、もうニキひとり守っていようと思った。安ホテルから、男の子の眠っている間にとびだして、ニキの部屋へとんでかえり、いきなり、わっ、逢いたかったあって、ニキのふとんにもぐりこんでいった時の安心感。ふとんをもちあげてくれ、あったまった脚で美波の脚をくるっとまきよせてくれ、さ、眠んなといって片腕を枕に、美波の首の下にすっとさしいれてくれる時の工合のよさ。やっぱり、ニキを裏切ったりしちゃだめだ。こんないい人めったにみつかるもんじゃないと思って、美波は急に、いつもの倦怠感なんかふっとんでしまって、ニキの上にとびついていき、めちゃめちゃに愛しちゃった。あの朝はよかった。浮気をした直後はあんなにいいものかと思ったから、二人めの男の子の時もつい、そういう気になってしまった。ニキとの間は、またもと通り、何ともいえない退屈さがかえっていたから。でも二人めは失敗だった。ハイミナール中毒の彼は、見かけだおしで、てんでよくも面白くもなかった。この次はうまくいくと思うよ。また逢おうよといったけれど、相手にしなかった。あの晩はまだ一時をまわったばかりだったから、帰ったら、ニキはまだ帰っていなくて、サラダをつくり、ビフテキを焼きあげたところへ帰ってきた。お掃除して、きちんと、寝床をとり、シーツもかえてあるのを見て、ニキはすっかり御機嫌になり、ブランディをのもうといいだし

た。銀座のエルのバーテンをしているニキが、うちでブランディをのむ時は一番上機嫌の時なのだ。もともとあんまりお酒が好きな方でもない。その時は、期待したほどのことがなかった。というより、美波は目をつむって、帆足の折れたヨットになって、早く波にきりきりさらわれてしまい、波の下にのみこまれてしまいたいとあせればあせるほど、瞼の中には白い鷗がとびちがって、いっこうに波は美波を包みこんでくれないのだ。遠くの方に、波のうねりがおこり、遠くの方に波の音が聞えているのに、美波をとりまく波は静かで冷たくて、美波を熱くもしてくれなければ、かゆくもしてくれない。美波はニキにしがみついて必死になればなるほど、軀の中がすうすうして木枯しが鳴っているような感じになる。だからいっそう、そうじゃないように顔をひきつらせ、腕も脚もしびれるほどに力をこめて腰をふっていた。そのことが最後までしっくりしなかったことよりも、ニキがそれに全然気がついてくれず、美波の演技を見ぬけなかったということの方がショックだった。男と女の間って、つまんないものだなあって、あの時はじめて思ったんだ。ニキは、久しぶりでいかにも堪能したという表情になり、愛してるよ、放すもんかと、寝言のようにくりかえしながら、美波の胸の中で眠ってしまった。そのあと美波は朝まで眠れなかった。

眠れないくせがついたのはあの時からかもしれない。

「どうしたの、生きてるの」

あんまりひっそりしているバスルームに不審をいだき、桐子がのぞきにいった時、美波は水に溺れたヒヤシンスのように清潔な表情で、うすい湯の中にのびのびと浮び、軽い寝息をもらしていた。

林の中に

武蔵野の名残りがまだいくらか残っているそのあたりは、空をつきあげているような大欅の並木があったり、雑木林の奥に思いがけない静かな池がひっそりと陽を吸いとってぬるんでいたりした。

そのアパートはそんな林のひとつを切り開いた土地に建っていた。駅から遠いのが不便で難だったが、それだけに、まだそのあたりは開けてはいず、閑静という点では理想的だった。こんな所がまだ東京の中に残されていたのかと奇蹟のようだった。

つぐみ荘という名にふさわしく、小ぢんまりして、部屋数は十にたりない。葉の落ちつくした雑木林の外から見ると、船のような感じがするそのアパートの一室を、桐子は

星野省吾と共同で借りてある。
都心のアパートは仕事場兼棲居なので、ひとりの寝起きには何の不便もないけれど、恋の場にはふさわしくない。電話は多いし、いつ人が訪れるかわからない。このアパートをみつけてきたのは省吾だったが、いよいよ借りる段階になった時はふたりでやってきた。
「あたしはいいけど、あなたは駅から不便じゃないかしら」
桐子は車を持たない省吾のためにためらった。
「大丈夫だよ。歩いたって三十分だ。それにバスだって、タクシーだってあるさ」
省吾に車くらい買えばと、桐子が自分で味ってる便利さからすすめた時、最初は曖昧に言葉をにごしていたが、あんまり何度もしつこくすすめる桐子に、業を煮やしたように、
「あるよ、車は」
といってびっくりさせた。
「まあ、そうだったの」
桐子は唖然とした表情をかくさず、省吾をみつめた。
「かみさんが乗るんだ」
「あ、そう」
桐子は、その時はじめて、省吾の家庭というものに、一向に興味も払わなければ、省吾の妻や子供を想像もしなかった自分の異常さに気づいたのだった。
私大の語学の助教授をしながら、翻訳者として名を通してきている省吾の身なりをはじめて気をつけて見るようになったのもそれからだった。
知人の出版記念会で逢ったのがきっかけで、二次会に誘われ、それから三ヵ月ほどたって、偶然、本屋の外国書籍売場で声をかけられるまで、桐子は、省吾のことを全く忘れきっていた。
その日、省吾がたまたま、印税が懐にあったという気持の弾みから、桐子が誘われ、かたつむりをたべにいった。そのおかえしという名目で、今度は桐子が省吾の出校の日、大学に電話して誘いだし、ふぐをおごった。
かたつむりをたべた日、桐子は、省吾の運命の川に結びついていく自分の運命の川の流れをありありと見るような想いを抱いていた。男に傾斜していく時の、軽いめまいに似た予兆があり、桐子は別れた男たちとの出逢いの頃を何となく思いだすのだった。
中年の男女の情事や恋のはじめは、男と女と、どちらが誘ったといいきれるものではない。男に先に口をきかせても、女がそうしむけた場合もあるし、女が先に軀を投げだしたところで、男がそれをさせたのだという場合もある。狎れあいの演出と演技で、幕あきを情緒ありげに飾りたいというのが言わず語らずのふたりの気持になり、そうなった時は、もうすでにふたりは共犯者なのであった。
桐子ははじめから星野省吾と結婚しようとか、同棲しようとかいう気持は持っていなかった。二つともにすでに幻滅していたし、恋はたまさかに逢うのが最高だと苦い経験

に教えられて、わきまえていたつもりだった。
何度か逢って、感覚的に互いに抵抗を感じない上、お互いの話がお互いに興味を持って聞かれることを識った後、ふたりだけのベッドの時間をわけもってみて、性愛の面でも性が合うということを識った。
省吾は貧しくはなかったが、豊かともいえない。年齢からいえば、同年輩の者よりはるかに稼いでいるかわり、税金もたっぷり持っていかれるし、学校だけを守っている仲間にくらべたら、職業費の本代だけでも馬鹿にならなかったし、著述業の方面での交際費だって思ったよりしたたかにかかるのだった。
桐子はそんな省吾に経済的負担をかけないという点でも都合のいい情婦だった。
桐子もまた貧しくもないかわり、金がありあまる階級でもない。自分の力で稼ぐものが、いつのまにか女ひとりのつつましい生活をまかなってまだ余裕が出来てきたというにすぎない。それでも、省吾にくらべたら、万事一まわり贅沢が許されるようであった。
省吾に家庭があり、仕事があり、一応の社会的信用もあり、いわば文句のない境涯でありながら、なぜ桐子との情事のような、見方によれば、人生の落し穴に、自ら落ちこむ危険を冒そうとするのか。桐子は、たちいって省吾に訊こうともしない。桐子が省吾を必要としたように、今の省吾は桐子を必要なのだろうと考え、省吾の家庭は、桐子の情事の場からは、全くちがった星の出来事のように、関りあいたくないのだった。
林の中のアパートは、二人で等分に金を出しあっているものの、省吾の方が使うことが多い。省吾は、次第に、この静かな部屋で仕事をするようになっているし、桐子は、省吾と逢う以外、わざわざこんな不便な所へやってくることはないからだった。
省吾の妻が車を運転すると聞いた時の愕きを桐子は桐子なりに分析してみる。
桐子は省吾の妻を、自分勝手に描きあげ、ひとつのイメージをつくりあげていたことに気づいた。つつましやかで、可憐で、男の誰もがいたわってやりたくなるような女……和服の青っぽい絣や縞が似合い、細い首筋に重たげな髷をまとめた髪型のしっくりする女……涙もろく、夫を世の中で一番頼もしい男と安心し、信頼しきっている女……。
ところが、その省吾の妻が、車を運転するという。桐子はその時、愕きをかくして、
「奥さん、お洋服なの」
と訊いた。
二人が二人の時間を持つようになって、省吾の妻がはじめて二人の間の話題にのぼったと、桐子は気がついた。
「きものも着るよ。ふだんは大体、洋服だけど」
「どっちがお似合い」
「どっちかといえばきものかな」
ぬけぬけと、よくいうものだと思いながら、桐子はもっ

とこの話題を長びかせたくなっていた。
「車はずっと前から？」
「うん、ぼくはさっぱりだめなんだ。方向感覚がだめなんだ。右と左が反対になるんだからね。一ぺんで教習所の方からお断りくっちゃった。うちのは運動神経が滅法いいんだ。バスケットの選手してたっていうから」
「愕いた」
「何が」
「あたしの想像してた人と、全然、イメージがちがってたみたい」
「どんなふうに」
「ふふ……まあね」
桐子はこんな会話の調子から、省吾が自分の妻を対外的に相当自信を持って誇っていることを感じた。
それならそれで、万事、じめじめせずに、情事を情事として、楽しめばいいのだと考えた。
やがて、また聞くともなく、ふとした話題から、省吾の妻の秋子が、造花の教師の免許級の腕を持ち、いくつかのグループに出稽古にも行くし、銀座のデパートのアクセサリー部に作品をおさめていることも識った。
「それじゃ、奥さん、相当稼がれるのね」
「まあね、自分の小遣いくらい」
「それじゃ、子供さんはどうしてるの」
「保育所に預けて、送り迎えは自分で車でやってる。家にはお手伝いがいるしね」
「へえ、じゃ理想的な家庭じゃないの、文化的でスマートで合理的で」
「よせよ。いいじゃないか、家のことなんか」
桐子は、ふっと、その時はじめて、どうして省吾は自分との情事など必要とするのだろうと思った。
省吾が、先はしらないが、ともかく現在、桐子との関係に、桐子以上に熱情を示しているのは桐子にもわかっている。
男はすべて家庭が不満だからとか、妻が気にいらないからとか、倦怠期だからとかいう、理由なくして、チャンスさえあれば、いつでも情事にふみこみたがっているようにしか思えない。
省吾を人の模範になるような男とも、自分の生涯の頼りになる男だとも思っていない桐子は、つきあうにつれ次第にわかってくる省吾の正体や値打の程度にもあわても愕きもせず、つづくまでこの情事をつづけてみようと思っていた。平凡だから、世俗的な面があるから、小市民的だから……それら省吾のすべての弱点や欠点をふくめても、尚、桐子には省吾がなつかしく、心の安らぎ場所として省吾の軀に憩いたいのだった。
省吾との逢瀬は互いの仕事の関係から、月に一度の時も月に二、三回のこともある。かと思うと、どうかすると、週に三度も逢える時がないでもない。
「ずいぶん逢ったと思っても、ほら、最高が月に七度ですよ、大したこともないわね、平均月五回ってとこかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com